HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	七戸長生著, 『世界の農民群像-そのバックボーンに学ぶ-』(全集 世界の食糧 世界の農村 3), 農文協, 1995年, 266頁
Author(s)	山田, 定市
Citation	北海道農業経済研究, 4(2), 83-85
Issue Date	1995-05-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62994
Type	journal article
File Information	KJ00009064943.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ベツ価格安定補償基金」制度のようなリスク負担の軽減策が必要と指摘する。

「第２節　農業経営の新展開」では、南幌町の野菜作の現状を分析する。キャベツを中心に展開され、札幌市場で有力な地位を築いているが、土地利用（輪作）の観点からはこれ以上の作付拡大は困難と指摘する。野菜・稲作の専業農家育成の可能性をＬＰで試算し、専業化が可能であると提起する。

「第３節　地域間格差の拡大と農地の効率的利用」では、南幌町の農地の上層移行と農地移動の集落間差異、農地価格を検討し、大規模農家の土地取得行動を展望する。

「終　章　大規模稲作地帯の課題と再編方向」の「第１節　北海道大規模水田農業の到達点」では、北海道の強みは水田規模の大きさにあり、１戸40haの稲作経営体も不可能ではないとし、今後の方向は「米麦一毛作」、「集約複合化」、「米麦一毛作プラス兼業化」であるとする。

「第２節　政策的救済の必要性」では、国家的土地改良事業によって形成された石狩川下流域の新開稲作地帯の諸問題は農政の責任によって解決されるべきであり、第１は基盤整備事業の農家債務を「免除」すること、第２は農地の買取とその近傍農家への貸付などによって転作調整に利用することを提言する。

「第３節　大規模稲作地帯の農業再編方向」では、今後の方向を大規模専門化路線と集約複合化路線に集約し、前者に対しては輪作加算制度、後者には大規模転作ハウス団地の設置とリース制度を提言する。さらに経営資産継承のための免税・融資制度、農地制度の見直し、共同化・作業受委託・法人化、後継者対策、新規参入促進等の総合的な対策を提示する。さらに経営集約化のための地域支援システムや農協のマーケティング機能の強化、土地改良区改革も提起する。

Ⅲ

以上の要約的な紹介でも明らかなように、本書は北海道の代表的な大規模水田地帯として石狩川下流域に位置する南幌町を調査対象に設定し、その歴史・現状を多面的に調査分析し、問題点を明らかにしながら必要な対策を提起しており、本書の目的は達成されている。その評価すべき点は、第１に共同研究に有りがちな論文集になることなく、各章各節が相互に脈略がよく取れ全体的な統一性が獲得されていること、第２に定性分析を中心にしながらも、計量手法も駆使され、立論の証明力が高いこと、第３に現状分析にとどまらず、発展方向とその条件についても提言され、説得力ある内容となっていることである。極めてレベルの高い研究成果であり、これは所属を超えた共同研究で培われた蓄積の賜であると考える。評者も大いな刺激を受けたことを付記したい。

（編著者は、東京農業大学）

七戸長生著『世界の農民群像
ーそのバックボーンに学ぶー』

（全集 世界の食糧 世界の農村 3）

農文協 1995年　266頁

北海道大学　**山田　定市**

いま、日本の農業は重大な危機に直面している。そのような危機的状況をもたらした主要な要因はわが国の農業政策に求められなければならいが、このような状況は農民にも致命的な打撃を与えつつある。

先日、農業・農村問題に関する北海道での研究会の席上のことであるが、報告者の一人から、調査にあたって農民に「いま、一番困っていること

は何か」とたずねたところ「全てです」との答えがかえってきたとの紹介があった。この難局にどこからどう着手してよいか皆目見当がつかない状況に追い込まれている農民が多数を占めていることも否定できない。

七戸長生著『世界の農民像-そのバックボーンに学ぶ-』は、これまで歴史の表舞台にほんとんど登場することのなかった農民が実は歴史のターニングポイントにあって決定的な役割を担ってきたことに着目し、そのバイタリティを支えたバックボーンに学んで、日本の農業の進路を切り開く農民像を探ることをめざしたまさにエキサイティングな研究書である。

評者は、かねがね一国の農業の位置づけは、その国の文化的水準を示す道標の一つであると考えている。それは脱農業化の度合いを近代化の進展と結びつける考え方とはむしろ逆であって、農業の産業的意義、農村・農民文化の人類史的価値をできるだけ積極的に評価しようとする視点である。むろん、近代化の意義やその現代社会における到達水準の進歩的意義を否定するつもりはない。近代化は基本において社会の進歩であることは疑いないが、問題は近代化をそれに先立つ人類史の脈絡の中に位置づける長期的視点と、さらに近代化を矛盾の展開として認識する視点の有無であろう。

このような観点に立ってみるとき、工業化を軸とする近代化の過程でその矛盾の集中点に位置したのが農業、農村、農民であったことは間違いない。それと同時に農業、農村、農民を「踏み台」とする近代化であったが故に、農民は基底において歴史の担い手であり、そのターニングポイントで決定的な役割を果たしてきたのである。言い換えると歴史の担い手としての被支配階級にスポットを当てた史観に立つことを意味する。

本書に多大の共感を禁じ得ないのは、このような史観において共通していると思うからである。その意味で、本書は同じ基本的視点に立った「世界の労働者像」の解明を求めるモチーフを含んでいるといえよう。

さて、世界の農民像として本書に登場するのは、それぞれ中国、ドイツ、アメリカの農民である。

本書の第二章では数千年の悠久の歴史を生き抜いてきた中国の農民像について考察されている。中国においては、歴史のターニングポイントに農民がその鍵を握る存在として登場し、一揆を含む彼らの行為が歴史の表舞台をも変えてきたのであり、さらに農民は度重なる歴史の転換点を生き抜いてきたのであった。

その中で、大陸性の苛酷な自然条件のもとでの「農の営み」によって「中国人特有の柔軟な現実主義と楽天的な相対主義」と人間関係を重視する気風が培われたとし、そのようなさまざまな可能性を幅広くとらえて楽天的な現実主義で対処していくことが、いまの日本の農民像としても学ぶべき点であることを著者は強調する。

第三章ではヨーロッパの農民像について探求される。ヨーロッパの農民は、いま、ガット・ウルグアイ・ラウンドの農業交渉における合意によっていっそう激しい国際競争の渦中に投げ込まれ、EUへの移行のもとで「共通農業政策」が国ごとに激しく変化しつつある。こうした中で、例えば旧西ドイツではこの30年ほどの間に農家数が半減する事態となっているが、他方、農業への政策的援助については国民の過半の支持がある。

このように一般市民からの強い共感を呼ぶと同時に、農民たちのうるおいのある営農と生活の調和がいかにして築きあげられたか、本章では、これを旧西ドイツに探っている。

その探求の道程は、ゲルマン民族の「魂のゆりかご」のグリム童話の世界へと読者を誘い、さらに「森]に象徴される共同体の意志、現代のマイスター農家に代表される技術者尊重の精神的風土、ドイツ農民戦争に代表される歴史の転換点においてその担い手としての農民像について体系的に分

析される。

ヨーロッパの農民文化を貫く強固なバックボーンからわれわれは何を学ぶべきか、あらためて深い洞察を求められる。

さて、第四章は「独立自営の人間形成のるつぼ」アメリカの農民像についての洞察である。かってレーニンが農業の資本主義化のアメリカ型として定式化したように、アメリカの自営農民は世界的にも独自の農民像を形成してきたのであるが、本章ではそのバックボーンであるフロンティア・スピリットを軸にその農民像に迫っている。

ここでもその独自の農民文化の象徴ともいえる姿をアメリカの開拓の歴史と交錯させながら、かのテレビドラマ「大草原シリーズ」にも登場したファミリーの中に探る。そのうえで、現代を生き抜く農場経営主の群像と農民像を主として面接調査とアンケート調査によって克明に考察する。

移民によるコミュニティの形成とその自由な主体の形成は、まさにアメリカ的民主主義ともいえる自由さと包容力と、さらにその苦悩を示していることを本書を通して認識をあらたにさせられる。

第五章は、上記の三つの世界の農民像の考察を通して、その教訓を引き出すいわば総括の章である。ここでは経済優先からの脱却と心豊かな生活を実現することがそのあるべき農民像として描き出される。

当然、それは発想の転換を抜きにしては成り立たないのであるが、それは単なる着想の転換にとどまらず、歴史的伝統に培われた農民文化の創造の課題であり、そのような農民文化を基礎とする民族文化の創造という実践的課題を著者は提示していると理解する。

これまで農業・農民問題の研究は農業経済学を基軸として蓄積され展開してきた。そうした研究が今後も基底に位置づくことは変わりないとしても、さらに総合的・学際的分析が強く求められていることはいうまでもない。

本書が難問ともいえる農民像の解明を通して、このような研究に新たな地平を切り拓いていることは疑いない。その意味で農学研究の新しい礎石をわれわれに提供しているということができる。

そのうえで、なお深めるべき課題も少なくない。原始共産体を出発点とする経済・社会システム（社会構成体）の転換と民族文化、民族問題の長期性との間にみられる歴史的時間の違いと相互関連をどのように理解するかという問題、さらにそのような歴史的文脈の中で農民文化が継承されると同時にあらたに労働者文化が形成されるプロセスをどのように解明するか、また、このような農民文化、労働者文化の形成過程における階級・階層性をどのように理解するか、という視点も重要であろう。

このような視点に立ってみるとき、例えば中国やアメリカの農民像のより個性的な有りようは、それぞれの国の内包する民族問題、地域問題（この両者は密接にかかわっているが）と深くかかわっているであろうし、ヨーロッパの農民像の洞察もドイツとともに、イギリス、イタリヤ、フランス、ロシアへと関心が広がることになろう。

また、農業に対する国民的合意の問題については、評者は、基本的には農民文化と労働者文化の関連の問題であると理解する。日本の場合、ヨーロッパと対照的に合意形成が弱く、政策の後退もいちじるしいのであるが、これは市民社会の成熟度と民主主義の内実にかかわる問題であると思う。

触れるべき論点はなお尽きないが、このような刺激的研究書の発刊を心からよろこび、筆者の慧眼に敬意を表するとともに、多くの研究者、実践者が本書を手にして一気呵成に読み切ることを是非お薦めしたい。

（著者は、北海道大学）